

仮想水を通して見える食の危機

横浜市立栗田谷中学校

三年 澤田 悠雅

世界各国では様々な農作物や畜産物が生産されている。その食料は生産国だけで消費されるわけではなく、食料を自国の生産のみで賄えない国が輸入して消費していることは知っている人も多いだろう。私達が住んでいる日本もこれに該当する。これまで日本が毎年たくさんのお食料を輸入してきたのは、日本人口の増加、農家や農業従事者の減少などが原因にある。もちろん、日本の産業の衰退が懸念されていることも忘れてはいけませんが、ここから水に関する問題なのだ。

皆さんは、「バーチャルウォーター」という言葉を知っているだろうか。これは、仮想水とも呼ばれ、実際に直接利用しているわけではないものの、間接的かつ目に見えない水のことだ。例えば1kgのとうもろこしを生

産するには約一二〇〇リットルの水が必要である。また、とうもろこしなどの穀物を飼料として消費する牛の飼育には、飼料を生産するのに必要とする水に加えて、牛そのものが消費する水も含まれる。このように、私達は食料を輸入するとき、実はたくさんのお水を目には見えない形で輸入している。これが目には見えない水、「バーチャルウォーター」である。

そして今、世界で水不足が深刻化していることをご存じだろうか。人口が予想よりも増え続け、水は飲料水だけでなく、農業や工業にも使われている。そのような中で日本人の多くが、日本は水不足ではないと思っているだろう。それは海外から食料を輸入すると同時に、大量のバーチャルウォーターを輸入しているためそう感じてしまうのだ。確かに、日本は世界平均の二倍の量の雨が降り、山などの様々な水資源に囲まれていると思ってしまう。しかし、実はその多くの水はそのまま河川に流れ出て海に行き、あるいは産業や工業の発達している日本の土地で汚染されている。食べ物のためにも水はとても大切で、貴重な資源だということに気づいただろうか。もちろん他の国々も同じことを思っているだろう。十年

後、二十年後にはさらに人口が増え、自分の国は水不足であり、食物を生産するための水を確保することが優先であると。

そこで、私達の普段食べている物を考えてみよう。そうすることで、改めて輸入品の多さが分かる。例えば、牛肉などの肉類、たまねぎ、にんじん、カボチャなどの野菜類も多く輸入されている。とうもろこし、大豆などもそうである。知らず知らずのうちに、私達は世界各国の水を使い、水不足の危険に晒されている国の大切な資源を食に使ってしまったているのだ。日本に食物を輸出している国々から見れば、日本は自国の水を使わずに食料を手に入れていたため、他の国々が自国のために輸出を止める可能性は、十分にあるのだ。日本の食卓が水不足により、もしくはバーチャルウォーターによる水の輸出が懸念された場合、こういった最悪の事態が起こってしまうのだ。

そのために私たちは、バーチャルウォーターを輸出する国に頼りすぎないことが求められている。また、日本の技術を生かしてきれいな水を作ることに協力することも重要だ。バーチャルウォーターを輸出する国に頼らな

い取り組みは個人であることができる。例えば、地産地消を進め、食料自給率を上げることや、食べずに捨てられてしまう食品を減らすことも水資源を守る取り組みとなる。

これからの日本の危機をバーチャルウォーターというものを通して実感し、個人単位で対策していくことで、私達の大切な水を守ることができる。水不足という大きな問題を決して他人事だと思わず、一人一人がしっかりと向き合い、私達の水問題を少しでも改善することが、日本の将来のために重要であると私は思う。